

日朝比較言語学への誘い

『長田夏樹論述集（下）』第31章

（原載：『角川・朝鮮語大辞典』角川書店，1986年2月）

世界最大の朝鮮語対訳辞書『角川・朝鮮語大辞典』大阪外国語大学朝鮮語研究室編への序文として、泉井久之助、服部四郎、村山七郎、河野六郎、浜田敦、大野晋、青山秀夫、梶井渉、梅田博之、陶山信男、安田章、大村益夫、菅野裕臣の諸先生方と共に寄せられた一文である。

はじめに洪万宗『旬五志』の東諺、俛仰亭宋純の時調を引いて日朝両語の文法の酷似を説明している。一般に日朝両語の文法の類似性を語る時、多くは現代語の作例、よくて現代文学作品からの引用に留まり、時調が引かれることはほとんどない。こうした朝鮮固有の古典文学からの珠玉の作品が引用されたこの序文は、朝鮮に対する関心が現代政治にのみ偏っていた時期に出版された、この大辞典の巻頭を飾るに相応しく、薫高い伝統的な権域への憧憬を誘う類稀な文章であると思われる。

引用例の文法が説明されたのち、現代日本語と現代朝鮮語の音韻体系が比べられ、子音の2項対立／3項対立の差、音節構造の違い、先行音節末子音の連音化(「音便」と呼ばれている)が説明される。ついで、「平音、激音、濃音」3項対立はさかのぼれば平音1系列のみであったことが説かれ、「シトギ」と qtek の関係を借用とし、qtek の同源語として、motifi を挙げ、「三」 seix < serix : mitu の対応に説き及ぶ。末尾で「若い有能な研究者に」日朝比較言語学の「地平を切り開」いてもらいたいことが説かれる。

『角川・朝鮮語大辞典』は編者の関心から語源に関する記述を多く含む。日韓両言語の系統関係に説き及ぶこの序文は辞書本文の記述と相俟って語史への関心を呼び覚ます。朝鮮語研究者として何よりもあり難く思えるのは、当時の朝鮮への関心の持たれ方とは全く異なる、背筋を伸ばしたゾンビの姿を髣髴とさせる朝鮮語世界への語りである。(伊藤英人)